

---

# **異界の聖戦**

電波良好

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

異界の聖戦

### 【著者名】

電波良好

N3576F

### 【あらすじ】

何の変哲も無かった筈の少年レオンは、世界を懸ける聖戦に挑む事に……。

太陽が地面を焦がす八月、歐米のとある国。

「あち……」

レオン＝クリオールの頬を汗が伝つた。

「よおレオン！ 調子はどうだ？」

「見りや分かるだろーが。相変わらずだよ」

レオンは魚の入った網を掲げ、苦笑いを浮かべる。  
両親のいない彼は物心ついた頃から祖父母に育てられていて、少しでも迷惑を掛けない様にと自ら漁場で働いていた。

太陽を見上げ、レオンは一つ溜息をつく。

「ちつ、この暑さじゃ魚がダメになっちゃつ」

レオンが再び前を向き歩き出そうとしたその時、ふと辺りは田陰に覆われた。

先程までの暑さは鳴りを潜めて風が吹く。

再び真上を見上げると、レオンはそれを視界に捉えた。

『モンスター』

衝撃と混乱の入り混じる頭の中でそれを表現するには、それが最も相応しかつた。

## 第1話「合成種族」

空から降る異形の生物。突然の出来事にレオンの四肢は固まり、ただただ黙つてそれを見上げている。

死ぬ。レオンはそう直感した。その直感は、異形の生物が見るからに膨大な質量を秘めていた事に起因する。

しかし轟音と共にそれが地面に墜落した時、レオンの体はそこには無かつた。

「なつ……ー？」

レオンは予期せぬ移動に目を丸くする。その後、自らの体が何者かに抱えられている事に気付いた。

「誰だ！？」

「落ち着きなさい。私は味方だ」

長めの銀髪に薄いフレームの眼鏡。男はこの状況でも静かに、冷静に言葉を連ねる。

『ガルルルルル…………ー！…』

その巨大な唸り声は地面を揺らし、レオンの脳に響く。

「やれやれ、少しばかりは場所を考えて下さいよ。一般人を巻き込む訳にはいかないでしちゃうが」

銀髪の男はゆっくりとレオンをその場に降ろした。

異形の生物はもう一度、大きく咆哮を上げる。二メートルはある  
うかといつ巨体、鋭い牙、厚い体毛。

銀髪の男はそれと正面から睨み合い、そしてゆっくりと腰元の剣  
を抜いた。

「ただの下級キメラか……」

(剣……………！…)

異形の生物は鋭く尖った右手で銀髪の男を襲う。その足音は地響  
きを引き起し、その眼光はまだ破壊を求めている。

『ガアアアアア……………！…』

男の銀髪が風で靡いたかと思えば、異形の生物の体は真つ一  
つに引き裂かれた。

土台を失った上半身が地面に墜ち、司令部を失った下半身が少し  
遅れてゆっくりと地面に倒れ込んだ。

「……………！…」

レオンは声を失い、その場に尻餅をついた。

銀髪の男は振り返り、その様子を見て優しく微笑む。

「やあ。驚かせちゃったかな」

「……………、歴代ランキング一位」

「はは、『じめんごめん。』『じゅうじゅう』何だし、ちょっと場所を変えよつ

＊＊＊

古びれた内装、寂れた空氣。レオンが常連として店主と顔馴染みになつてゐる酒場に、レオンと銀髪の男はやつてきた。

「僕はアルロワ＝リバーウッド。よろしく」

「……レオン＝クリオールです」

そう言つて、レオンはアルロワの差し出した右手をとる。

「さつきの……何だつたんですか」

「うん、当然の疑問だね」

アルロワは爽やかに笑い、コーヒーカップをテーブルに置いた。

「……それを話すには、まず世界の歴史について知つてもらわないとね」

「歴史？」

「約百年前、この世に悪魔と呼ばれる種族が誕生した。悪魔は類を呼び、共に世界を滅ぼそうと人間を襲い始めた」

「世界を……」

「更に悪魔はその過程で合成種族を創り出し、最早生身の人間に对抗する術は無かつた」

レオンは静かに喉を鳴らした。

「……お？『じゃあ何でまだ世界が滅びてないんだ』って顔だね？ レオンくん！」

「あ、まあ……。いや、いやいや、て言つた、悪魔なんかこの世に存在する訳無いじゃないですか！」

アルロワはまた「一ヒーカップを口元へ運び、中身を一気に流し込む。

「悪魔つていうのは、百年前の人々が彼らを恐れてつけた呼び名なんだ。それ程悪魔の存在は脅威なのさ。今レオン君が想像してる悪魔とは違うよ」

「……じゃあ、今までどうやって悪魔から世界を守ってきたなんですか？ その悪魔は百年も前から存在しているんですね……？」

レオンは恐る恐る尋ねる。それを見てまた、アルロワは優しく微笑んだ。

「悪魔を抑える為、神はこの世に『神の使徒』を産み出した。その数108人。神の使徒は皆生まれながらに特殊な能力を持つていて、彼らだけが唯一悪魔達に対抗する事が出来たんだ」

「神の使徒……」

「そう……悪魔が勝てば世界は滅び、神の使徒が勝てば世界は守られる。神の使徒vs悪魔の、世界を懸けた聖戦だ」

「そしてレオンくん。君こそ、悪魔から世界を守る神の使徒なんだ」

レオンの持つ「一ヒーカップの中身が静かに揺れた。

## 第2話「使徒のめざめ」

「俺が…………？」

「そうだ。レオン＝クリオール」

レオンは混乱している頭の中で、必死にアルロワの話を整理していった。

「いやつ……、それ何かの勘違いですよ！　俺特殊な能力なんて持つてないですし……」

「そう……厄介な事に108人の神の使徒が全員能力に目覚めている訳では無く、多くは自らの能力に気が付いていない場合が多い。だから、全世界に点在する神の使徒の大半はまだ発見されていないんだ」

「……、そんな事言われても……」

その時、酒場の天井を巨大な豪腕が打ち碎いた。

その豪腕は酒場の大半を潰し、柱を失った天井が崩れ落ちる。

「！！　合成種族！！！」

「え？、これもさつきのーー？」

「ああ……、どうやらキメラは君がお目撃いらっしゃい」

「そんなん！！」

レオンとアルロワは酒場を飛び出し、広場へと出た。キメラはその巨体を揺らし、一人の後をついてくる。

「アルロワさん！　またさつきみたいに倒して下さいーーー！」

レオンはアルロワの方を向いて叫ぶ。  
しかしアルロワは、少し考えた後広場のベンチに座り込んでしまつた。

「アルロワさん！？」

「ん…………さつきはね、君が神の使徒だと思ったから助けたんだ

だ

「！？」

「君が神の使徒じゃないなら、僕が君を助ける理由は無いんだよね」

アルロワはそう言つて冷たく笑つた。

「ふざけるな！？」

レオンはアルロワの胸倉を掴み、荒々しく叫んだ。

「アンタがあいつを止めなきゃ、沢山の一般人が巻き込まれるんだろ！？」

「ん…………かもね」

「だったらー！俺が神の使徒だと関係なく、アンタはあいつを止めなきゃいけない筈だ！！」

そう言つと再びアルロワは小さく笑い、レオンの目を正面から見つめた。

「君があいつを止めれば良い。…………『神の使徒』、レオン＝クリオール」

「バカな…………」

「どっち道、君が逃げれば僕も逃げるよ。そうすれば、少なくとも

この辺りの人々は相当死ぬだらうね」

ツノ！

「君が、人間を救うんだ。

卷之三

キメラは天を仰いで咆哮を上げ、レオンに向かつて襲い掛かる。ゆっくりと振り向いたレオンの目には、確かな決意と覚悟が秘められていた。

『灼熱の業火』！！！

レオンの右腕が眩い光を放ち、そして右手の掌から火柱が飛び出した。

「！」

その炎はキメラを貫き、キメラは苦痛の断末魔を上げる。キメラがゆっくりとその場に倒れこんだ時、レオンはアルロウの

方を向き直した。

「分かつた……。俺が神の使徒だつてんなら、バケモノだろうが悪魔だろうが全部止めてやりますよ」

俺が、世界を救います！」

アルロワは、嬉しそうに微笑んだ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3576f/>

---

異界の聖戦

2010年10月15日13時13分発行